

令和 6 年 2 月 22 日

教 育 長 様

研究コース	
B グループ研究B	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
741702	
選定番号	234

代表者	校園名 :	大阪市立矢田北小学校
	校園長名 :	清水 健司
	電話 :	06-6705-1601
	事務職員名 :	東 将武
申請者	校園名 :	大阪市立矢田北小学校
	職名・名前 :	首席 川口 祐太朗
	電話 :	06-6705-1601

令和5年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和5年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	B グループ研究B	研究年数	継続研究（3年目）
2	研究テーマ		確かな学力を身に付けるための指導・支援方法を探る —子どもの特性を知るアセスメントと環境整備を通して—		
3	研究目的		1、児童・生徒へのアセスメントからそれぞれの発達にあった支援方法の探求 2、環境整備UD化の追究 3、同一進学校下の学校で連携し、児童・生徒の課題に対する協同的支援の実施 4、専門的な講師による研修会や講演会への参加を通じた、教員の専門的知識と自己研鑽の意欲の向上		
4	取り組んだ研究内容		いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSコマック 9.5ポイント） 1) 連携三校協議会 <ul style="list-style-type: none"> ・6月（本年度の研究内容の共有） 矢田北小学校・矢田東小学校・矢田中学校 2) 活動報告（2年）・研修会を開催し、SWPBSの取り組みに向けた研修を行った。 <ul style="list-style-type: none"> 1月24日 講師 大阪教育大学 庭山 和樹教授 ・今年度の「がんばる先生支援」研究支援の報告会を行った。 ・授業検討と研修会を通して発達課題のある児童に対しての手立てや支援法を検討した。 3) SWPBSに向けた研修を行った（年4回） <ul style="list-style-type: none"> 7月28日 SWPBSについて（矢田北小） 8月30日 クラスの中にあるPBS 算数チャレンジについて（矢田北小） 10月30日 クラスの中にあるPBS （矢田東小） 1月24日 次年度以降の、取り組みについて。 3) Hyper-QUを年2回実施し、児童の学級満足度、社会性についてアセスメントをとった。 <ul style="list-style-type: none"> 1月29日に講師 大阪教育大学 水野 治久教授を招聘し、検査結果について研修を行った。 4) 算数チャレンジを年3回行い、算数の下位スキルの習得率をはかり、その後の指導に生かすことができた。（クラスでの最初の3分で練習問題を行ったり、学びサポーターと連携を図り、放課後学習に生かしたりなど） 5) ビジョントレーニング・コグトレ・グッドイナフ <ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて、認知機能トレーニングの実施 ・1年、4年にグッドイナフを実施し、体の不器用さや、スポーツテストに向けてのボディイメージの確認を行い、その後の指導に生かすことができた。 		
5	研究発表等の日程・場所・参加者数		研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。		
	日程	令和 6 年 1 月 24 日	参加者数	約 25 名	
	場所	矢田北小学校 PC室			
	備考				

		<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上 <p>○認知機能や視機能を向上させるトレーニングに関する研究を進めることにより、児童・生徒の「対人スキルの獲得」や「書く力」・「読む力」・「運動能力」などを育成する。</p> <p>『検証方法』</p> <p>3校の抽出学級の児童を対象としたアンケートの「人とうまくコミュニケーションをとることができますか」の質問項目において実践前後で比較し3ポイント上昇させる。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>校内で実施したコミュニケーションスキルを問うアンケートで検証と考察を行うこととした。「あいさつはできているか」「人とうまくコミュニケーションをとることができますか」などの質問項目に対する肯定的な回答の結果(調査対象：全学年 153名)</p> <p>7月 75% ⇒ 10月 87% ⇒ 2月 90% (昨年度7月 74% ⇒ 2月 75%)</p> <p>肯定的な回答が大幅に上回る結果となった。</p> <p>その要因として、学校としての行動基準を定め、チームとしてあいさつ週間に取り組んだり、シールや声掛けなどで、子供たちを称賛し、認める活動を行ったことがあげられる。</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上 <p>○認知機能や視機能を向上させるトレーニングに関する研究を進めることにより、児童の「対人スキルの獲得」や「書く力」・「読む力」・「運動能力」などを育成し子どもの自信につなげる。</p> <p>『検証方法』</p> <p>3校の抽出学級の児童・生徒を対象とした視写テストにおいて速度と正確性を実施前より上昇させる。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>正しく图形を描き写したり、記号の場所を正しく覚えるなどの「見る力テスト」(アセスメントチェックシートより)の正答率 (調査対象：中1年 45名)</p> <p>2月 83% (昨年度2月 ⇒ 75%)</p> <p>正答率が上回り、昨年度よりさらに8%上昇させることができた。ビジョントレーニングやコグトレ(ET)などのトレーニングを行うことで、視機能の向上につながったと考えられる。</p> <p>【見込まれる成果3】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上 <p>○不器用さを改善させるための教室・学校環境づくりを進め、さらにUD化を進める。それらの取り組みが、児童・生徒のボディイメージを高める結果につなげる。</p> <p>『検証方法』</p> <p>体の発達、特に腕や手指の運動能力と関係が深い描画検査グッドイナフ人物画知能検査や運動能力を計る検査において実施前後で比較し平均値を3ポイント上げる。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>グッドイナフ人物画知能検査(調査対象：1年 28名) 10月 15点(5歳11か月) 1月 18点(6歳8か月) 目標以上の3ポイント上昇することができた。</p> <p>日々の取り組みの中で、ボディーイメージを持つような声掛けやコグトレ(OT)などを行うことで、特に腕や手の認知はより細かく描ける子が増えている。</p> <p>また、全国体力・運動能力調査に向けて4年生でもグッドイナフを実施した。 2月 32点(9歳2か月)という結果になった。</p> <p>体の認知において実年齢よりも低い結果となった。令和6年度のスポーツテストに向けて、不器用さや、左右差ができるような体育科の学習や運動につなげていきたい。</p>
6	成果・課題	

		【見込まれる成果4】
		<p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>○教員の研究会・研修会参加を通して発達に対して専門的な知識を身に付けることができる。</p>
6 成果・課題		<p>『検証方法』 教員へのアンケートを実施し「研修会に参加して役に立った」の肯定的回答を80%以上にする。</p>
		<p>〔検証結果と考察〕 アンケート結果より「研修会に参加して役に立った」の肯定的な回答が100%であった。今回、大阪教育大学の庭山准教授や水野治久教授に来ていただき、PBSやABC行動分析、Hyper-QUの見方などを学び、次年度それぞれの学校で行動マトリクス、行動目標を立てていく。今回の研修を活かしていきたいという意見が多くかった。</p>
【研究全体を通した成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。		
1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する		
<p>今年度は、「確かな学力を身に付けるための指導・支援方法を探る－子どもの特性を知るアセスメントと環境整備を通して－」を研究主題とした研究を初めて行った。本研究を通して、児童のアセスメントの視点を増やす研修会を行う予定としていたが、コロナ禍の影響もあり十分に行うことができなかった。また、研究対象の児童・生徒の割合が少なかったためエビデンスレベルの高い結果を得ることができなかつたことが課題といえる。しかしながら、少ない研修の中でも、専門家との連携をとることで、子どもたちに対して課題が何かを見極め、適切な支援方法を考え実践していくことができた。その結果、子どもたちの変容が現れるようになり、子どもたち自身もできるようになったことで自己効力感が向上していった。合わせて、教師のモチベーションの向上にもつながったことが大きな成果といえる。今後も、教員の研修会を充実させるとともに、3校の交流を含め教員間の連携を図り、さらなる支援方法の獲得をめざしたい。子どもたちのアセスメントをしっかりととり、課題にあった支援を行うことで、子どもたちの確かな学力を身に付けさせための研究に努めていきたい。</p>		
2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する		
<p>今年度は、「確かな学力を身に付けるための指導・支援方法を探る－子どもの特性を知るアセスメントと環境整備を通して－」を研究主題とした研究の2年目である。本研究を進めるにあたりコロナ禍の影響や担当者の業務の多さから計画的に行うことができなかった。また、研究対象の児童・生徒の割合が少なかったためエビデンスレベルの高い結果を得ることができなかつたことが課題といえる。3校での取り組みを進める上で、担当者が、途中で代わったこともあり進行に遅れも見られた。しかしながら、少ない研修の中でも、専門家との連携をとることで、子どもたちに対して課題が何かを見極め、適切な支援方法を考え実践していくという共通認識を3校それぞれが持つことができたのは大きな成果と言える。また、自校だけではなく、地域の学校としての課題を捉えチームとして課題解決に向けた取り組みをしていきたいと話し合うこともできた。合わせて、教師のモチベーションの向上にもつながったことが成果といえる。「もっと知りたい」「うちのクラスも見てほしい」などの意見も多く上がり、研修にも参加したいと他の学校からの問い合わせもあった。今後は更に、3校での教職員間の連携を図り、地域の子どもたちの課題解決に向けた取り組みを進めていきたい。そして、次年度、3年目の研究として、小学校から中学校までの追跡調査を行い、子どもたちの変容を、データとして残していき、継続した指導、系統立てた取り組みを進めていきたいと強く願う。</p>		
3. 継続研究（3年目）		

今年度は、「確かな学力を身に付けるための指導・支援方法を探る 一子どもの特性を知るアセスメントと環境整備を通してー」を研究主題とした研究の3年目である。3年目ということもあり、1つ1つの研修をより充実したものとなるよう計画を進めた。その結果、次のような成果が見られた。

- ①1つ1つの研修が内容の濃いものとなり、教職員の意識の変容につなげることができた。
- ②研究対象の児童・生徒の割合を高めるために、対象児童の幅を広げたり、各校と比べることで、エビデンスレベルを高めることができた。
- ③3校での取り組みを進める上で、担当者が、話し合いを重ね、それぞれの学校での課題解決に向けた取り組みを進めることができた。今後も自校だけではなく、「地域の学校」としての課題を捉え、チームとして課題解決に向けた取り組みをさらに進めていきたい。

この3年間の取り組みを続けていく中で、大阪教育大学の庭山准教授とSWPBSについて、研修を重ねていくうちに、理解が深まり、教師のモチベーションが向上した。あいさつ週間のシールや授業中のPBSなど積極的に取り組んでいこうとする教員の姿も多く見られた。研修の中では、「もっと知りたい」「これはどうなつてますか」「こんな方法はどうですか」などの具体的な意見も多く上がった。研修にも参加したいと近隣の小学校からの問い合わせもあり、参加者からは「本校でも広げていきます」との声をいただくこともできた。

今年度で一旦研究は終わりになるが、これからも3校の教職員間の連携を図り、地域の子どもたちの課題解決に向けた取り組みを進めていきたい。そのために、系統性のあるPBS3校合同カリキュラムの設定、アセスメントデータの蓄積、保存、活用を進め確かな学力を保障できる支援を続けていく決意である。そして、子どもたちの変容を、アセスメントデータとして残していく、継続した指導、系統立てた取り組みを続けていきたい。

《代表校園長の総評》

1. 新規研究（1年目）※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する

矢田中学校下の2小1中で取り組むことにより、小中一貫した学校間連携を図る手がかりとすることことができた。残念ながらコロナ過のため、3校合同での研修会を開催することができなかつたが、各校の代表が各種の研究大会や講座を受講してそれぞれの校内で伝達研修を行うことで、教員個々の専門的な知識を深められるようにした。当初の計画から今の状況下でできることを探りながら、大学の専門家による児童に行った検査の分析をしていただくなど、児童相互の関係を客観的に把握することができ、次年度の研究への足掛かりを作ることができた。今後は、今年度検査を実施した学年を経年で追跡調査し、特に小中での連携を強化しながら取組を推進する中で研究の成果を実証していきたいと考える。

2. 継続研究（2年目）※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する

矢田中学校下の2小1中で取り組むことにより、小中一貫した学校間連携を図る手がかりとすることことができた。残念ながら今年度もコロナ過のため、3校合同での研修会を開催することができなかつた。しかしながら、大阪教育大学の庭山准教授の講演を受け、本校だけではなく、他の教員も刺激を受け、それぞれの学校の課題や良さについて考える機会があり、次年度の取り組みに向けた、大きな一步を踏み出せたのではないかと考える。それぞれの教員が持つ思いをまとめ、それぞれの学校で、行動マトリクスを作っていくことが理想である。目指す子ども像実現のために、チーム学校だけではなく、地域の課題にも目を向け、地域としても連携して動いていきたい。大学や専門家との連携も図り、応用行動支援、ポジティブ行動支援を学校のチームとして取り組むSWPBS（スクールワイドポジティブ行動支援）など、教職員間のつながりを大切にした指導をしていきたい。今後は、今年度検査を実施した学年を経年で追跡調査をし、特に小中での連携を強化しながら取組を推進する中で研究の成果を実証していきたいと考える。

3. 継続研究（3年目）

矢田中学校下の2小1中で取り組むことで、小中一貫した学校間連携を図る手がかりとすることことができた。庭山准教授の指導を受け、それぞれの学校で取り組みが進んだ。小学校では、あいさつ週間や学習クライミングチャレンジなどを独自の取り組みを進め、子どもたちの自尊感情を高めることができた。中学校でも、Hyper-QUや試写テストなどのアセスメントデータから、生徒指導に活用することができた。今後も教職員の行動目標を一致させ、同じ目線で子供たちに寄り添い活動を進めていくことで、子供たちのやる気につなげ、望ましい行動が多くなるよう支援していく。加えて、それぞれの学校で、行動マトリクスを作成し、2小1中の意見を合わせ取り組むことで、9年間の継続した指導につなげていく予定である。

研究は今年度で終了となるが、3年間研究した成果を「地域の学校」の学力向上につなげていきたいと考える。大阪市には、学力格差で低学力の子がどの学校にも在籍している。本校の研究が「確かな学力」を身に着けるための指導法・支援法として、広く市内に認められ、未来の子どもたち力になれば、このうえない喜びである。今後も続けて子どもたちのために尽力する所存である。